

エクスカージョン

適地適木を現地に見る

大

今回のエクスカージョンでは、大文字山登山道沿いに銀閣寺横から大の字方面に歩きます。

京都盆地周辺の山は堆積岩からできていますが、大文字山から比叡山にかけては花崗岩が分布します。3億年ぐらい前に海の底でたまった泥からできた岩石に1億2千万年ぐらい前に地下深くでマグマが貫入してできた火成岩です。貫入の両境の泥岩が熱せられてホルンフェルスという岩石に変性し、その一帯が地上に隆起して風化を受けるとホルンフェルスは堅いので浸食されにくく、大文字山と比叡山の山頂部になりました。したがって、両山頂の間に花崗岩が分布します。

花崗岩は石英、長石、黒雲母などの鉱物からなり、表層から風化を受けると真砂（まさ）と呼ばれる崩れやすい土壌ができます。長石と黒雲母は分解されると粘土になり、粘土の多い真砂は通気性や水はけが悪くなります。滋賀県の湖南アルプスの花崗岩は後者の例で、東大寺の大仏殿を建築した際のヒノキの産地でした。しかし、大文字山から比叡山にかけての花崗岩は白川砂がとれるように通気性や水はけのよい土壌ができます。花崗岩の南北の堆積岩は通気性や水はけがよくないので、植生や植物の分布が異なります。

松枯れでアカマツが目立たなくなりましたが、花崗岩地の二次林にはもともとアカマツが少なく、コナラだけでなく、アカシデ・イヌシデのシデ類を含めて落葉広葉樹が優占します。東山ではシイが目立ちますが、シイは侵入していません。ツツジ類もモチツツジの分布は両方に見られますが、コバノミツバツツジは分布せず、ヤマツツジが見られます。カキノハグサのような珍しい植物も分布します。

大文字山登山道沿いは、このような花崗岩地と堆積岩地の植生の違いだけでなく、堆積岩地の平坦部にはアカマツ林ではなくクヌギなどの薪炭林が作られているなど、適地適木を現地に見るのに適した場所です。

案内：藤田昇（森林再生支援センター理事長）

1946年、大阪府生まれ。京都大学大学院理学研究科修了後、京都大学助手、助教、准教授を歴任。専門は植物生態学。ギボウシ属植物の生態と分類、深泥池浮島の生態、森林の常緑性と落葉性、モンゴル草原の生態などを研究してきた。退職後の現在、専門を生かせるボランティア活動に取り組む。

2014年5月18日(日)

10:00 白川通りと今出川通りの交差点を東に進んだところにある「銀閣寺橋西詰公衆トイレ」前に集合

12:30頃 現地解散

参加費：CRRN会員 無料
会員外 100円

※当日お支払いください

★事前申込み不要。時間になったら出発

★少雨決行

★山歩きができる格好で

★当日緊急連絡先 090-7769-4127（松井）

